



『ケアの担い手の臨床力を どう育てるのか』

—スーパービジョン関係における「成長過程」の検討から—

結城 俊哉
(福祉学科 教員)

はじめに

本論では、社会福祉領域に限らず看護・教育・心理等の幅広い対人援助専門職（以下、「ケアの担い手」と称する。）が習得しておくべき「臨床力とは何か」・「実践力とは何か」についてささやかな試論を展開してみたい。

なぜならば、筆者自身、今日、ケアの担い手の養成養育に携わる者としてクライアントに対して有効に作用する「臨床力」を学習者の中に、どのように育てたら良いのかという命題が日々突き付けられていると実感しているからである。そのため、今回は、スーパービジョン関係に着目し、その中で展開される「成長過程」の検討を手がかりとして考えてみたい

I. ケアの担い手に関する養成教育の方法

1. 体験と経験の関係

ケアの担い手を目指す学生を前にして、実習教育者や臨床指導者は何に気をつけたらよいかここで一度、考えてみたい。それは、現場実習は、当事者（＝学生／新人のワーカー）にとって、今まで知らなかった馴染みのない「非日常的な生活世界」の中に「身を置いて、時間を過ごす」ことの意味を理解し、教育指導することが重要な教育的観点であることを指摘しておきたい。

ここでの議論は、哲学的なものではなく「非日常的な生活世界」の中で展開される援助実践を基盤としながら、「個別に認知された援助実践が有する体験の総体」としての「臨床経験」がもたらす意味とは何かについての検討である。

その意味で、「ライフ（Life）の視点」として知られる、「生命、暮らし（日々の生活）、生涯（人生）」という生活の主体者が生きるトータルな「生の経験」をどのように理解すべきなのかに関する命題なのである。

『大辞泉』（小学館）によれば、「…（中略）…用法：『経験』の方が使われる範囲が広く、『経験を生かす』『人生経験』などと用いる。『体験』は、その人の行為や実地での見聞に限定して、『恐ろしい体験』『体験入学』『戦争体験』のように、それだけ印象の強い事柄について用いることが多い。」⁽¹⁾

本論では、この辞書的用法に準拠しながら、『体験』を「限定された特定の印象的な時間、場所、出来事における個人の行為として記憶され、身体化された事柄」として定義する。さらに、『経験』を「さまざまな個人的体験の総和であり、さらに他者との共通体験として共有され統合化された事柄」であるとする。

つまり、「経験」とは、「他者の経験ともつながる共通の体験、エピソードの集合体であり、その中に存在する意味を解説もしくは解釈できる体験の総体」と定義しておきたい。

例えてみるならば、「体験」とは、個人における強い意味を持つ断片（ピース）であり、その断片をジグソーパズルのようにつなぎ合わせることで1つの絵柄（「経験」）として共通認識が可能な「解釈／理解」がその場に立ち現れ可視化されるものだと考えている。

その為、現場における臨床教育指導者は、実習生自身が、一連の個人的体験の意味を「トータルな自分の経験として物語る」ことができるように、そして、スーパービジョン関係の中で共感的で且つ相互理解をもたらす豊かな経験として実感されるような関与が求められている。

2. 実習現場において臨床教育指導者が考えておくべきこと

次に、実習現場の臨床教育指導者の指導方法に焦点を当てながら、実習生と実習体験を振り返る作業の意味について検討してみたい。臨床実習指導者は、「実習の場」は実習生にとって、昨日まで自分が生きていたリアルな「日常的な生活世界」とは異なる「非日常的な生活世界（＝馴染みの無い生活環境）」として立ち現れ、心理的には何らかの「不安・戸惑い・恐れ」の気持ちを抱いている状態であることについて意識的且つ自覚的であることが求められている。

しかし、この「非日常的な生活世界」は、実習が開始され、日々の関わりを重ねることで、次第に実習生の「日常的な生活世界（＝馴染みのある生活環境）」へと次第に変容していく。ここでは、その変容過程の中で実習生に生じる困難な課題をめぐる指導の要点について考えてみたい。

（1）臨床教育指導者が考えておくべき指導の要点

以下では、2つのケースを例にあげて指導の要点について考えてみたい。

1) 「障害者施設」の中で、利用者との援助関係作りに困難、違和感を感じて実習の場で動けなくなっている実習生の場合

【指導の要点】：このような実習生の場合は、「自分は、何かしなければいけない」、「何かすべきだ」という強い思い（観念）に囚われていることが多いと考えてみて欲しい。例えば、障害者施設での実習の場合には、言語表現・意思表示に困難を抱える肢体不自由者とは、相互に交わすコミュニケーション能力の違いから、相手のニーズが読み取れずに立ち止まってしまうことがその典型例かも知れない。その場合の指導の要点としては、「自分の中の囚われの観念」から自由になることが必要だと提案すること。そして、極めて単純で素朴な方法だが、今はまだ「相手（利用者）に具体的な何かをする」のではなく、「相手を知る／理解すること、つまり相手（利用者／クライアント）から「受け取ること」そして、傍らに寄り添いながら、「待つこと」・「居ること」の重要性とその具体的な方法についての理解を促すことである。⁽²⁾

2) 実習施設の中で何の問題も無く、すんなりと利用者（例えば、高齢者・障害者）と援助関係が取れているように見える実習生の場合

【指導の要点】：実習施設での実習に、違和感無く自然に溶け込んでしまえる実習生が時にいることがある。その場合は、「あの実習生は、とてもよくやっている。なにも心配することは無いようだ。」と実は考えないで欲しい。臨床教育指導者として、「初めての場所なのに、何故そんなに自然に溶け込んでしまえるのか」と考えてみるのが肝要である。

具体的には、「実習は、楽しいですか？何か困っていることはないかな？」と問いかけてみることである。実習生から「毎日とても楽しくて、仕方ないです。自分が利用者さんから、必要とされていると感じることが多くて、とてもやりがいがあります。」という返答がある場合には、特に要注意である。何故ならば、そこには、実習生の内面に「過剰適応反応」という「無理という負荷」が存在している場合が多いものだと考えてみて欲しい。さらに、それは「感情労働」⁽³⁾と呼ばれる対人援助職の病理として知られる「バーンアウト問題（燃え尽き症候群）」、「共依存関係」と連鎖する危険性がある。

実習指導として振り返りの作業をする場合、「プロセス・レコード」を活用しながら「実習体験の振り返り」に焦点を当て、実習生として「出来たこと、出来なかったこと」ではなく、「その時に、どのような思い／気持ちだったのか」という情緒的側面に焦点化した指導をすることで、「何か無理している自分」を自己覚知するという経験がもたらされることが多い。⁽⁴⁾

そして、出来れば「何故、ケアの担い手としての対人援助職を志したのか？」と問いかけてみることで、実習生の抱えている深い悩みが語られる場合がある。

しかし、「志望動機を尋ねるアプローチ」は、場合によっては個人の治りきつ

ていない瘡蓋（かさぶた）の状態で保護されている精神的な外傷体験（辛い記憶）を呼び覚ますこともあるため、深追いを回避した慎重な関与が必要とされる。

（２）「プロセス・レコード（process record）」の活用法

プロセス・レコードは、「過程記録」とも呼ばれる記録方法である。このプロセス・レコードは、スーパービジョンの中でも活用される意義は大きいと、ケアの担い手となる実習生や臨床実習指導者は、「プロセス・レコード」についての理解は必要不可欠である。ここでは、記録方法としての「プロセス・レコード」とは何かについてその活用法も含めて述べておきたい。

『社会福祉辞典』^⑤（2002）の説明を以下に示す。

援助者とクライアントとのかかわり（相互作用過程）を時間的経緯にしたがって記録したケース記録のことをいう。…（中略）…ワーカーとクライアントの時間的順序に従った具体的で客観的な関わり（行動・態度・発言）の事実経過と、その経過にともなう＜その時、その場＞における、援助者の主観的な判断・考え・感情などを同時に記録することにより、援助関係の展開過程をリアルに描き出すことが可能となる。そして、スーパーバイザーを交えてのケースカンファレンス等で、ワーカーとクライアントの援助関係のあり方や、自己覚知につながる洞察を深めること、さらに、ケースとのかかわりの意味をより深く理解し、具体的な援助方法を考える資料となる極めて重要な記録である。〔社会福祉辞典編集委員会編（2002）pp.70-71〕

このように、日々の実習記録や実践記録として描かれる記録内容も含めて「プロセス・レコード」は、幅広く対人援助職者の臨床力・実践力を鍛えるために多様な活用法が期待できる記録ツールである。つまり、関与（介入）方法についての振り返りの作業に向けたアプローチを可能にする記録なのである。そのために、「プロセス・レコード」は、利用者・クライアントとの援助関係において、援助者自身が「気がかり」・「困難」・「戸惑い」・「不安」等を感じた臨床場面の中で展開された相互の言葉、行為のやり取りを再現しながら、その場におけるリアルな自己関与のあり方を吟味することが可能となり、膠着した状況の打開策を探るという目的をもったスーパービジョン関係を実現する極めて重要な意味を持つ記録様式なのである。

Ⅱ. スーパービジョン関係という方法論をめぐる検討

～ケアの担い手の成長とは何かに着目して～

スーパービジョン (supervision) という考え方について、ケアの担い手の養成教育と処遇の向上を目指して、スーパーバイザー (経験を積んだ臨床的教育指導者) とスーパーバイジー (新任の経験の浅いワーカー・学生等) がスーパービジョン関係の中で展開する教育訓練の方法である。基本的視点としては、①管理的機能、②教育的機能、③支持的機能、があることが広く認識されている⁽⁶⁾。

1. スーパービジョン関係における機能とケアの担い手の成長

ここでは、「スーパービジョン関係」を通して、新任のワーカーや実習生自身がどのような成長を辿るのかについて、筆者の実習経験と臨床教育指導の経験から学んだことを手がかりとして検討する。そのための前提として「スーパービジョン関係」というのは、スーパーバイザー (supervisor) とスーパーバイジー (supervisee) との基本的信頼関係に支えられた「ケアの担い手 (ワーカー)」と「ケアの受け手 (クライアント／利用者)」の中で生じる援助関係の再現であることを、ここで確認しておきたい。

次に、スーパービジョン関係が持つ代表的な3つの機能が、スーパーバイジーの成長過程においてどのような役割を果たすのかについて述べてみたい。

①**管理的機能**：この機能は、スーパーバイジーが所属する援助機関が一定の水準を果たしている、もしくは保っているかどうかについて、スーパービジョン関係の中で展開 (表明・確認) される機能である。そこでは、スーパーバイジーの「働き (援助実践)」を手がかりとしてアセスメントが行われ処遇実践の評価と点検が実施される機能である。この機能は、スーパーバイジーにとっては、組織における自己の役割が、チームの一員としてどのような働きをもたらしているのかについて極めて自覚的になれるという効用がある。

ある新任のワーカーが「この施設で働く時に、スーパーバイザーに見守られているという感覚が持てたことで、孤立感を持たず仕事が出来そうです。そして、チームで仕事をすることで、自分の中から、スタッフに援助を求めても良いのだという安心感が持てました。」と語ってくれた姿を今でも鮮明に覚えている。

【組織や機関におけるチームの一員である対人援助職として果たすべき役割の自覚化の促進】

②**教育的機能**：この機能は、スーパーバイザーによって、スーパーバイジーが持

つべきだと判断される「倫理、価値、知識、技能（スキル）」の習得を支援し、相談機関・施設・組織における「対人援助の質」の向上を目指す機能のことである。この機能を通して、スーパーバイザー自身に、その相談機関や施設の援助方針（処遇）が伝えられ、一定水準以上の力量を持つケアの担い手の役割とは何かについてロール・モデル（役割モデル）が提供される。その発展として、ワーカー自身が「自分にとって何が不足しているのか」と自問し、その問いかけを自覚することは、日々の現場実践、クライアント、同僚から「学ぶ」という態度を涵養することになる。このことを通して、臨床現場の実践をまとめ、外部にむかって発表（報告）するという取り組みが生まれる。そして、この機能は、実践現場の閉鎖性、密室性、膠着状態を打破する契機（モーメント）となり、それは現場に、開放性、多様性、柔軟性をもたらすことになる。

数年前に担当した実習生が「援助者として＜学ぶ＞という機会は、実にさまざまなところにあるんですね。その意味は、現場実践の中から学ぶことの大切さと必要性について意義深いものだと思いました。でも、現場だけの経験主義者ではなくて、理論の検証も含めて、その中から実践を理論化するという学び方がとても重要なんですね。」と話してくれた言葉が印象に残っている。

【倫理、価値、知識、技術を「学ぶ」ことの重要性和態度の涵養】

③**支持的機能**：この機能は、スーパーバイザーとスーパーバイジーの基本的信頼関係に基づく援助関係を意味している。これは、カウンセリング的及びケースワーク的な要素を持ち、スーパーバイジーが「今、何に迷い、悩み、戸惑い」を抱えているのかについて、スーパーバイザーは、傾聴の姿勢を貫きながら共感的に受容する役割を果たすことで支持的な役割を果たすことになる。そして、スーパーバイザーが、必要に応じて共に問題解決に当たる場合もあるが、基本は、本人の自己決定を尊重しながら支援する役割を果たす。この機能を通して、ケアの担い手としてのアイデンティティ確立に向けた歩みを可能にすることができる。

ある研修で担当した中堅のワーカーが、「スーパービジョンを受けるというのは、自分がクライアントの立場に身を置いて、スーパーバイザーから支持（支援）を受けるというものであるんですね。この経験は、援助者としての自分をより深く考える機会となりましたよ。援助原則は、知っているだけではダメで、実感として体感したことがとても良い経験になりました。自分が、対人援助の専門としてどうあるべきかについて、これからも考え続けて行きたいですね。」と語っていたことが思い出された。

【ケアの担い手への支持と専門職アイデンティティを探究する姿勢の形成】

2. ケアの担い手の成長過程にみる3要件

これまで述べてきたスーパービジョン関係をめぐるワーカーの成長過程として抽出された3要件を以下に明示しておく。

1. 組織や機関におけるチームの一員である対人援助職として果たすべき役割の自覚化の促進。
2. 「倫理、価値、知識、技術」を「学ぶ」ことの重要性和態度の涵養。
3. ケアの担い手への支持と専門職アイデンティティを探究する姿勢の形成。

これら3要件は、スーパービジョン関係の機能を通してみたワーカーの成長要件であり、極めて、基本的で重要なものである。このことは、精神分析における教育分析とは重点の置き方や深化の方向性はもちろん異なる。しかし、基本構造は同じで、対人援助専門職者としての専門職性に求められる「役割・倫理・価値・知識・技術」と「アイデンティティ」の確立に向けて機能する側面についてスーパービジョンの果たす機能は共通である。

(しかし、この点についての詳細な検討は、紙面の関係上、別の機会としたい。)

Ⅲ. ケアの担い手の臨床力の育て方

1. 実践力としての臨床力の意味～「型」と「マニュアル」の取り扱い方

筆者は、以前、援助における「生きた型」について検討したことがある。そこでは、『ケアの稽古論』(7)と題して、「芸事(アート)としてケアの型」について検討したものであった。結論から言えば、援助場面において自由自在で自然な動きを可能にする「生きた型」の習得を目指すことで、問題状況が時々刻々変化する臨床実践の現場における「実践力(対応能力)」としての「臨床力」が習得されるものである。

そして、それは、「画一化された対処方法(How to)が記述されたマニュアル」を読み込んでいるだけでは実現しえないことについての問題提起を行なったものである。つまり、多様に変化する問題状況に応じて臨機応変に対処する技量というものは、「型」の修練をとおして「生きた型」の習得を目指す以外に実現し得ないことについて述べた。

2. 「アウェアネス(awareness)」の必要性について

臨床教育指導者(スーパーバイザー)にとって、実習生/学習者(スーパーバイジー)に最低限必要な教育課題は何かと問われたならば、「自己(我)を知ること」(自己覚知/自己理解)の重要性について自覚することである、と答えたい。私達は、完璧(パーフェクト)な援助者でありたいと願うものだが、援助という

仕事は、常に人間としてやるべきことの限界を超えて無理を強いられている仕事なのである。例えるならば、対人援助職者は、日常的に無理なつま先立ちを強いられ、背伸びをしながらその仕事の任にあたっている存在であるという自覚が必要なのである。

例えば、伝統的な制服（ユニフォーム）のある仕事として、裁判官、警察官、自衛官、医師、看護師、僧侶、牧師、神父等をイメージしてみると解りやすいかもしれない。彼らの仕事は、生身の人間が担う役割としては、その仕事はとても個人的には背負いきれない重い責任を持つものである。その為、彼らは、制服をその身に纏うことによってその役割を引き受けることが漸（ようや）くできるようになるのだという話を聞いたことがある。

ケアの担い手も同様なのではないか。ワーカーが仕事を担う役割を演じる際に、社会的関係において「弱者」としての立場を余儀なくされている高齢者・病者・障害者・児童・母子・ホームレス等の人々と向き合うことは、時に人間として傲慢になる危険性の高い仕事であるという「アウェアネス（気づき：awareness）」をもつ必要がある。

そして、ケアの担い手の「臨床力」を育てるために、臨床（実践）現場に問われていることとして、ケアと呼ばれる仕事の特徴は、他者の「生の困難」としての「痛み、苦悩、困難、怒り、悲しみ、不安」の傍らに静かに寄り添い、クライエントの中の「可能性としての希望」を求めて、共に立ち向かう仕事であるという自覚を持ちながら、「考える力」、「判断する力」、そして、さまざまな「アウェアネス（気づき）」の種を自分の中で「育てる力」なのだと提案しておきたい。

おわりに…「手の思想」と援助とは何か

以前、京都の三十三間堂を訪れた時に感じたことなのだが、そこに立ち並ぶ千手観音像と向き合った時に、千手観音の持つ「手」の圧倒的な存在感に言葉を失ったことがある。それは、一つひとつの「手」が衆生、つまり生命あるもの全てに向けられた「救済の手」そのものであることに気づいたからであった。筆者は、最近この「手」の存在が援助の本質を表現するアイコン（icon）なのではないかと理解している。ケアの担い「手」としての援助者にとって、「手」に関わる言葉の豊かさはとても意味深いものだ。

例えば、「手を当てる、手がかり、手加減、手探り、手遅れ、手が届く、手間ひまかける、手心を加える、手ざわり、手応え、手がける、手強い、手始め、手を添える、手を切る等々」というように何故か、「手」にまつわる言葉は、人と人との関係、人と物との関係と距離感、人への思いを表現しているように思える。

私達自身が、臨床（実践）現場の中で、ケアの担い手として学び、成長するためにも、この「手の思想」が問いかける「援助（ケア）とは何か」という命題を

忘れてはならないと考えている。

(注一覧)

- (1) 『デジタル大辞泉』(小学館)(CASIO:XD-B9800)に収録。
- (2) 「待つこと」については、拙著(2013)『ケアのフォークロア』高菅出版, pp.170-172において対人援助の基本技法4として「待つことー時間を味方につける技法」として論じた。参照して頂ければ幸いである。
- (3) 「感情労働」については、Arlie Russesll Hochschild(1983):The Managed Heart - Commercialization of Human Feeling. The University of California Press. (=2000 石川 准・室伏亜希共訳『管理される心ー感情が商品になるとき』世界思想社)に詳しい。
- (4) 結城俊哉(2013)「第4章 ケアの担い手の病理現象とは何か」／『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法』高菅出版, pp.65-86の中で援助職者の病理について詳しく論じた。
- (5) 社会福祉辞典編集委員会(2002)『社会福祉辞典』大月書店, pp.70-71.
- (6) 社会福祉辞典編集委員会(2002)『社会福祉辞典』大月書店, p.309
- (7) 結城俊哉(2013)「第6章ケアの稽古論」／『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法』高菅出版, pp.110-132に詳しく論じた。

(参考文献)

- 荒川義子 編著(1993)『スーパービジョンの実際＝現場におけるその展開のプロセス』
川島書店
福山和女編著(2005)『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房
黒川昭登(1992)『スーパービジョンの理論と実際』岩崎学術出版社
Robert L.Barker(1999) The Social Work Dictionary 4th ed. the NASW Press.p.473

(自己紹介として、主な研究活動の紹介)

1. 研究領域・テーマについて(担当科目を含む)
ノーマライゼーション論、障害者福祉論、障害福祉支援学、災害福祉学(災害ソーシャルワーク論)
2. 著書(単著・編著・共著・論文等)
 - 1) 単著
結城俊哉(1998)『生活理解の方法：食卓から社会福祉援助実践の展開』ドメス出版
結城俊哉(2013)『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法を考える』
高菅出版
 - 2) 共編著
岡村正幸、植田章、結城俊哉共編著(1997)『社会福祉方法原論』法律文化社
岡村正幸、植田章、結城俊哉共編著(2001)『障害者福祉原論』高菅出版
奥野英子、結城俊哉共編著(2007)『障害科学の展開：第3巻 生活支援の障害福祉学』
明石書店
植田章、結城俊哉共編著(2007)『社会福祉方法原論の展開＝現場実践を生きる』
高菅出版
眞船拓子、杉本正子、結城俊哉、丸山美和(2013)共編著『(改訂版)看護職のための
社会福祉・社会保障』ヌーヴェルヒロカワ
 - 3) 共著(主なもの)

結城俊哉 (2003)「第3章 生活理解の方法としてのモード・ファッション」／高瀬智津子編『社会福祉実践の今日的課題』高文堂出版, pp.75-109.

結城俊哉 (2006)「第5章 ケアの境界線に位置する<身体>へのまなざし」／石川道夫編著『ケアリングのとき～こころと手』中央法規出版, pp.112-135.

結城俊哉 (2006)「第11章 ハンディをもつ人と家族・地域生活」／相澤譲治編『三訂：新・ともに学ぶ障害者福祉～ハンディをもつ人の自立支援に向けて』(株)みらい, pp.227-248.

結城俊哉 (2009)「第7章面接調査研究法」・「第11章質的研究法」／前川久男・園山繁樹共編著『障害科学の展開：第6巻 障害科学研究法』明石書店, pp.139-163, pp.237-265.

結城俊哉 (2012)「ホームレス及び貧困問題と精神保健」／広沢正孝・藤井達也・四方方清編『第2巻 精神保健の課題と支援』中央法規出版, pp.265-274.

結城俊哉 (2014)「第5章第Ⅲ節：精神保健福祉に関する調査研究」／新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編『改訂新版 第2巻 精神保健学』へるす出版, pp.257-272.

結城俊哉 (2014)「相談援助活動の基本原則と展開の方法」／結城俊哉・長野秀樹著『相談活動と言語としての手話』文理閣, pp.11-90.

4) 論文等 (主なもの)

結城俊哉 (1992)「食生活調査面接による生活理解の方法」,『社会福祉学：第33-1号』(通巻46号), 日本社会福祉学会, pp.88-118.

結城俊哉、平吹登代子 (1993)「援助方法としての電話相談—相談ツールとしての電話」,『児童相談研究 第12号』東洋大学児童相談室, pp.40-60.

結城俊哉 (1999)「社会福祉実践における援助関係の基本構造と臨床的課題」,『聖学院大学論叢 第11巻第4号』, 聖学院大学, pp.377-394.

結城俊哉 (2000)「装いの援助論～生活理解から生活援助の関わりへ」,『響きあう街で～相互支援活動の実践から：No.13(通巻50)』, やどかり出版, pp.66-80.

結城俊哉 (2003)「精神障害者の地域生活の現状と今日的課題(1)～生活保護ソーシャルワーカーが理解しておくべきこと」,『生活と福祉：No.567』, 全国社会福祉協議会, pp.20-25.

3. その他の活動 (今、現在)

(所属学会) 1990年4月 日本社会福祉学会 (～現在)
1993年5月 日本ソーシャルワーク学会 (～現在)
1998年10月 日本精神保健福祉士協会 (～現在)
2012年4月 日本福祉文化学会 (～現在)

(社会的活動) 2006年2月茨城県守谷市福祉有償運送等運営協議会 (委員長) (～現在)
2007年4月調布市こころの健康支援センター運営委員会 (委員長) (～現在)
2012年10月日本社会福祉学会・学会誌編集委員 (～現在)